

大乘仏教の伝承者たち

——satpuruṣa をめぐって——

渡 辺 章 悟

大乘仏教の菩薩を表す言葉にサットプルシャ (Skt. satpuruṣa, P. sappurisa) という語がある。この「善き人」good or worthy or true man を意味する語は、すでに原始仏典、特に偈頌の中でしばしば見られる。たとえば同じ sappurisa [dāna] sutta (『善士經』) でありながら、『増支部』(AN) では、家庭を持ち、修行者に布施する〈在家の仏教信者〉とし、『中部』(MN) では、自らを誇らず他を蔑まない、すぐれた〈比丘〉のことであるとする。さらにブッダを意味したり、預流や不還などの有学の聖者とする例もある。

この用法は、『婆沙論』や『俱舍論』などのアビダルマ文献にも継承され、Mahāvastu『大事』(Mv) のような仏伝文学を経由して、善男子 (kulaputra) や菩薩 (bodhisattva) と同義で用いられ、大乘仏教の伝承者として一定の役割を持つようになる。さらに、多くの大乘經典にはバドラパーラ (bhadrapāla) などの十六人の固有の善士 (正士、賢士、丈夫) という在家の菩薩として描かれる。

本稿ではこの satpuruṣa の概念が、初期仏教から大乘仏教に至る過程でどのように変遷したのかをあきらかにする。その考察を通じて、大乘仏教の伝承者の姿を解明することとしたい。

1. 初期仏典における sappurisa

パーリの毘奈耶には sappurisa の用例はほとんど見られない。その数少ない例を見ると、世尊がアーナンダに対して「汝等善き者は」と呼びかける例 (Vinaya 1.7)、魔神が多くの比丘を殺害したことを後悔する鹿杖 (migalaṇḍika) 比丘に対して、「その〔利益に〕によって多くの功德を追求している。善き人よ。汝は未だ渡らざる者を渡すのである」と褒め称えた例 (Vinaya 1.69) がある程度である。このように、比丘への呼びかけとして sappurisa といわれる以外、ほとんど見るべきものはない。ここで初期仏教の代表的な sappurisa として、Dhammapada の二つの

例をあげておく。（以下、パーリの出典はすべて PTS edition による）

花の香りは風に逆らっては進んでいかない。旃檀もタガラの花もジャスミンの花もみなそうである。しかし、善き人々の (sataṃ) 香りは、風に逆らっても進んでいく。善き人 (sappurisa) はすべての方向に薫る。(Dhammapada 54, KhN 8)

賢者・智者・博学の人・堅忍の人・持戒者・聖者、そのような善き人 (sappurisa)、賢者に従うべきである。あたかも月が星宿の道を動くように。(Dhammapada 208, KhN 31)

以上のように、賢者等の総称が sappurisa であり、修行者の目標、リーダーと見なされ、その地位は高い。

(1) 在家者としての sappurisa sappurisa には在家者と出家者の二つの用法がある。そのなかで、在家者の代表例として、『相应部』(SN) の詩文を見ておく。

「①母に孝養する人、②家長に仕え、③柔和な言葉を語り、④誹謗することなく、⑤慳貪を離れ (macchera-vinaya)、⑥真実を語り、⑦怒りを制御する〔等の七禁戒足 (satta vatapadāni) を行う〕人、彼こそ実に善き人 (sappurisa) なりと忉利天の神々はいふ、と〔世尊は述べた。〕」(SN 1.228)

上記の⑤については、最初に「生涯慳貪の垢を離れた心で家にとどまり、寛容にして常に施す準備をし、施捨を喜び、乞う者に従い、施し分配することを樂しむべし」と世尊によって説かれていることから、sappurisa は明らかに在家者であることが確認できる。ただし、この在家者としての用例はあまり見られない。

(2) 出家者としての sappurisa 出家者としての sappurisa は、枚挙にいとまがない。その多くは、以下のように預流、不還の聖者として用いられる。以下は預流の聖者が入る位として善人地に言及する例である。

「比丘たちよ、これらの法（六根・六識・六境等）をこのように〔無常・変化・変異するなどと〕信じ、信解するならば、この者は随信行者 (saddhānusāri) と言われる。かれは正性決定 (sammattaniyāma) に入り、善人地 (sappurisabhūmi) に入り、凡夫地 (putthujjanabhūmi) を超えている。彼は業を行って地獄・畜生・餓鬼界に生まれることがない。また、かれは預流果 (sotāpattiphala) を現証せずに死ぬことはない。比丘たちよ、これらの法がこのように、慧によって、量によって、理解し認められるならば、この者は随法行者 (dhammānusāri) と言われる。かれは正性決定に入り、善人地に入り、凡夫地を超えている。〔中略〕比丘たちよ、これらの法をこのように知り、このように見るならば、この者は預流者、破滅しない者、決定者、上位の覚りに趣く者と言われる」(SN 3.325)

このように、随信行者・随法行者、それぞれが正性決定・善人地に入り、凡夫

地を超える。このように認知するのが預流者であるという。

また、『中部』「善人経」(MN 3.3755)では不還の聖者としての *sappurisa* について詳細に述べている。本経では、ブッダがサーヴァッティーに近いジェータ林のアナータピンディカ僧院の比丘たちに、善人の法 (*sappurisa-dhamma*) と不善人の法とを説く。そこで善人の法とは、「高貴な家から出家したのでなくとも、①法の随法を實踐し、②正しく實踐し、③随法行者となるならば、彼はそこにおいて供養されるべきである」(no ce pi ulārabhogakulā pabbajito hoti, so ca hoti dhammānudhammapaṭipanno sāmīcipaṭipanno anudhammacārī, so tatha puṇṇo) とし、衣・托鉢による食事・座臥処・医薬品などの資具を得ることなどに言及する。

このように、27項目に亘って上記の章句を繰り返すが、その項目の中には森林住の頭陀支を受持する者を始め、十二頭陀支が説かれ、四禪・四無色定・最後に想受滅 (*saññāvedayita-nirodha*) まで説かれる。この想受滅は、不還者 (*anāgāmin*)、漏尽者 (*khīṇāsava*) のみが入り、凡夫は入らない。したがって、善人法とは不還以上の聖者までの位をいうのであろう。

(3) ブッダあるいは聖者としての *sappurisa* 次に預流や不還とは限定できないが、聖なる弟子に教えを説く指導者を *sappurisa* という例もある。

「また比丘たちよ、聖なる弟子にして、聞があり、もろもろの聖者を見、聖者の法を熟知し、聖者の法によく導かれ、もろもろの善き人 (*sappurisa*) を見、善き人の法を熟知し、善き人の法によく導かれ、思惟すべきもろもろの法を知り、思惟すべきでないもろもろの法を知る者がいる。」(MN 1.9)

この例は、凡夫に対して聖なる弟子 (*ariyasāvaka* 有学の聖者) の生き方を対照させて説く定型句である。ここに述べられる聖者 (*ariya*) と善き人 (*sappurisa*) とは同義であり、この引用の後に、この仏弟子には欲・生存・無明の三つの煩惱が生ぜず、断たれるという。さらに、「これは苦である。苦の生起である、苦の滅尽である」と正しく思惟する。その人に有身見 (*sakkāya-ditṭhi*) ・疑惑 (*vicikicchā*) ・戒禁取 (*sīlabbataparamāsa*) という三つの束縛 (*tīṇi saṃyojanāni* 三結) が断たれる」とする。つまりこれらは「見ることにより断たれる煩惱」であるから、預流道 (*sotāpatti-magga*) の聖者についての説明であり、その比丘が「善き人の教えに導かれる」というのであるから、「善き人」とはブッダあるいは高位の聖者であろう。

次に『長部』「結集経」には四預流支について次のように説いている。

四つの預流支がある。(1) 善き人に親近すること、(2) 正法を聴聞すること、(3) 正しく

思惟すること、(4) 法の随法を実践することである。(DN 3.227)

このように、善き人に近づくこと (sappurisa-saṃseva) は、預流の聖者の第一条件となっている。続いて「ここに聖なる弟子は仏に対して揺るぎない信仰 (aveccappasāda) を備えている」とあることから、先の例と同じく sappurisa は、預流の聖者に教えを説くブッダのことであろう。

2. アビダルマと親近善士

(1) 『婆沙論』の善士 『婆沙論』(T1545, 877c21ff.) では、善士とは正見をそなえ、結を断じた有学の聖者であり、七種類の次の生涯への生まれ行き (七善士趣) が示される。そして、これは預流・一來の聖者には説かないことを述べる。さらに、有説として、世尊は預流と一來との区別をするために七善士趣を説いたのであり、[不還の] 有学が正見ないしは正定法を成就するなら、善士というのであるとする。ここでいう「契経」とは、『増支部』(AN 4.70ff) の七善士趣 [経] (sattapurisagati) であり、このことは、『俱舍論』によっても確認できる。

(2) 『俱舍論』の七善士趣 (sapta satpuruṣa-gati) 『俱舍論』「世間品」(AKBh [Pradhan 1979: 122.4ff.]) でもこれを承けて、「不還は五つである。すなわち中般涅槃 (antarā-parinirvāyin) と生般涅槃 (upapadya-p.) と無行般涅槃 (anabhisamkāra-p.) と有行般涅槃 (sābhisamkāra-p.) と上流 (ūrdhvasrota-p.) である」といい、さらにこの『増支部』の「善士趣」(satpuruṣa-gati) という経名を引用する。

また、『俱舍論』「賢聖品」第六でもこの五不還説や九種不還説、さらに七善士説が詳細に分析されている。そこでは「どうして経中に七つの善士趣が説かれているのか」云々といい、預流や一來にはない不還の般涅槃を解説する。

これらは「速やかに般涅槃する (速般)」、(「ゆっくりと般涅槃する (非速般)」、(「久しくして般涅槃する (経久般)」という般涅槃の時間にしたがって、三つの中般涅槃者、三つの生般涅槃者、一つの上流〔不還〕というように、七種の不還を区分する。あるいは、中般・生般・上流ともに速般、非速般、経久般それぞれを三分して、九種の善士趣に区分して注釈するが、いずれにしても北方アビダルマ論書では不還の聖者を satpuruṣa とする伝承を継承している。

(3) 四預流支の第一として 次に『婆沙論』や『集異門足論』などで、有学の修行法として四預流支が述べられるが、その第一として「四預流支者。一親近善士。二聽聞正法。三如理作意。四法隨法行。云何親近善士。答善士者。謂佛及弟

子」（『集異門足論』 T1536, 393a11-13）と善士に親近すべきことが述べられる。これは先に引用した『長部』「結集經」に由来するものである。また、「善士とは、仏及び〔その〕弟子を謂う」と明記することも重要である。

その他、四預流支及び親近善友 (satpuruṣa-saṃsevā) は、『三昧王經』をはじめ、『大般涅槃經』・『解深密經』等の經典類や、『宝性論』・『仏性論』・『瑜伽論』など、如来蔵、唯識関連の文献など、多く的大乗經論に繼承されてゆく。このように、『長部』や『相応部』を始原とし、北方のアビダルマでも論じられる四預流支の第一「善き人に親近する」という用法に、大乘になって仏・声聞の他に、菩薩を読み込んでいることは注目すべきである。

3. *Mahāvastu* の satpuruṣa

説出世部所伝の律蔵資料によって纏められた *Mahāvastu*（以下 *Mv* と略）は、初期仏典にもとづいた非常に古い要素もあるが、4～5世紀頃の記述も見られる。本書には管見による限り、25件の satpuruṣa の用例があり、その頻度も高い。

(1) 預流果の聖者 *Mv* における satpuruṣa は、ニカーヤに見られるのと同様、ブッダ或いは有学の聖者として用いられる。この用例は僅かである。

人中の最高者にして仏法を畏れない人は、法に相應せる、一切の有情の善を彼に説けり。眷屬と共にその法を識別するや、王は三結を捨て去りて初果〔預流果〕を獲得せり。また、無数の人も初果を獲得せり。善き人たる王よ (satpuruṣā rājāṃ), 慈しみの最高なる力を見るべし。」 (*Mv* 1.192)

この引用で、「王は三結を捨て去りて初果〔預流果〕を獲得せり」(trīṇi saṃyojanāṃ tyaktvā prāptavāṃ prathamāṃ phalaṃ) といい、その王に対して「善き人たる王よ」(satpuruṣā rājāṃ) と述べていることから、satpuruṣa は預流果の聖者ということになる。したがって、この説はニカーヤにたどられるものであろう。

(2) ブッダとしての satpuruṣa *Mv* は最初にマハーカーティヤーナとマハーカーシャパの対論で十地説を概説する。その中で、第二地の菩薩の第二十番目の意向として「最高の人 (puruṣottama) [になろうという] こと」が述べられている。ここでいう善き人 (satpuruṣa) もブッダのことを指すとみられる。*Mv* ではこの他にも、獅子のような人 (puruṣasimha, narasimha), 最上なる人 (puruṣarśabha), をはじめ、多くのブッダの異名が述べられる。

(3) 菩薩の定型表現 次に燃灯菩薩について、幾つかの尊称を用いて讃える定型表現が見られるが、そのなかに satpuruṣa が用いられる。これは bodhisattva が

ブッダの前生を指す語として登場し、やがて部派文献や大乘仏教などで、悟りを希求する修行者という普通名詞に変わっていったのと同様の变化である。燃灯菩薩を介して列挙される *Mv* の用例は、その変遷の初期的事例として注目される。

「また彼（燃灯菩薩）は、… 理解力を持ち、念を持ち、堅固で、慧を有する、①象のような人、②獅子のような人、③牡牛のような人、④赤蓮華のような人、⑤白蓮華のような人、⑥重荷を背負う人、⑦〔メール山のような〕人、⑧善き人、⑨高貴な生まれの人、⑩無上なる〔人〕、⑪調御丈夫、⑫理解力がある人、⑬記憶力のよい人、⑭堅固な人、⑮知ある人が（*puruṣanāgena puruṣasimheṇa puruṣarṣabheṇa puruṣapadumena puruṣapuṇḍarīkeṇa puruṣadhaureyeṇa puruṣeṇa satpuruṣeṇa puruṣājāneyeṇa anuttareṇa puruṣadamyasārathinā gatimena smṛtimena dhṛtimena matimena*）、いつでもどこでも、知るべきであり、獲得すべきであり、覚るべきであり、正等覚すべきであるものは、どんなものでもすべて、〔獲得し、覚り、正等覚して、〕一心刹那に結びついた智慧によって、無上正等菩提を現等覚したのである（*ekacittakṣaṇasamāyuktayā prajñayā anuttarāṃ samyaksaṃbodhim abhisambuddho* //）（*Mv* 1.229）

この引用箇所には燃灯仏菩薩の十五の異名が列挙されている。これらの一つ一つは菩薩、或いはブッダの異名として単独で用いられるものであるが、このような纏まった形式は他にはあまり見られない。そもそもこの場面は、アルチマット王の息子ディーパンカラ（燃灯）が、菩薩として燃灯仏となり成道する。

この箇所はブッダの成道を描く際の定型的章句となっており、*Mv* には同類のものが他に三例（*Mv* 2.133, 2.284–285, 2.415–416）ある。第一例に較べると後の三例はさらに異名の数も多くなるが、すべてガウタマ・ブッダの降魔成道の場面であり、*satpuruṣa* は「ブッダとなる菩薩」を指しているといえよう。注目すべきことに、上記の *satpuruṣa* を含む15種からなる一連の〔燃灯〕菩薩の尊称表現が、『八千頌般若』（*Asṭ* [1960:165–166]）を始めとする幾つかの初期大乘經典に継承される。

さらに、これに続く「一心刹那に結びついた般若によって、無上正等菩提を現等覚したのである」という成道に関する定型表現が、般若經にも継承されるように、*Mv* と般若經の影響関係が *satpuruṣa* を通じて具体的に指摘できる。

4. 般若經の *satpuruṣa*

(1) 『八千頌般若』の *satpuruṣa* の並列表現 『八千頌般若』（*Asṭ*）には、*satpuruṣa* は *asatpuruṣa* を含み、わずか三例にすぎない。その中で *Mv* の燃灯菩薩の十五種の異名と同類のものが以下に見られる。

「不退転の菩薩摩訶薩は（*avinivartaniyo bodhisattvo mahāsattvaḥ*）、家庭の中に住んでいて、

あれこれの欲望の対象を享受しても、捜し求めず、むさぼらず、執著しないで、それらの欲望の対象を受ける。… 彼らは家庭の中に住んでいるときにも、ときには正常な、ときには正常でない〔方法では〕生計をはからない。不正な方法でもなく、正しい方法でのみ生計をはかる。… なぜかという、彼らは①善き人たち、②偉大な人たち、③最上なる人たち、④雄々しい人たち、⑤端正なる人たち、⑥牡牛のような人たち、⑦崇高なる人たち、⑧誇り高き人たち、⑨英雄たる人たち、⑩重荷を負った人たち、⑪赤蓮華のような人たち、⑫白蓮華のような人たち、⑬高貴な生まれの人たち、⑭象のような人たち、⑮獅子のような人たち、⑯調御丈夫たちであって（① *satpuruṣair* ② *mahāpuruṣair* ③ *atipuruṣaiḥ* ④ *puruṣapravaraiḥ* ⑤ *puruṣaśobhanaiḥ* ⑥ *puruṣarśabhaiḥ* ⑦ *puruṣodāraiḥ* ⑧ *puruṣaśauṭṭraiḥ* ⑨ *puruṣapuṃgavaiḥ* ⑩ *puruṣadhuryaiḥ* ⑪ *puruṣapadmaiḥ* ⑫ *puruṣapuṇḍarikaiḥ* ⑬ *puruṣājāneyaiḥ* ⑭ *puruṣanāgaiḥ* ⑮ *puruṣasimḥaiḥ* ⑯ *puruṣadamyasārathibhiḥ*），あらゆる衆生に最高の安樂を享受させるはずなのである。スプーティよ、家庭の中に住んでいる菩薩摩訶薩たちはこのようであるが、それは般若波羅蜜の力に満たされているからである。スプーティよ、これらの形状、これらの特徴、これらの根拠をそなえている菩薩摩訶薩たちは、無上正等正覚から退転することがない、と考えられるのである。」（*Aṣṭ* [1960:165–166]）

この引用では、*satpuruṣa* は、不退転の在家の菩薩で、般若波羅蜜を行ずる菩薩のことを言う。ただし、この一連の尊称表現は、小品系の漢訳では『道行般若』・『大明度経』・『小品般若』といった古い漢訳に見られず、玄奘訳『大般若経』「第四会」「第五会」と『仏母般若』という新しい漢訳にのみ確認できる。

また *Aṣṭ* では、*Mv* (1.229) の異名が15種であったのに較べ16種と詳細になっており、名前が一致しないものもあるが、*Mv* の15名のうち9名を含んでいることから、両者の関連は無視できない。また、*Mv* の第四例 (*Mv* 2.415–416) と般若経ではサットプルシャが第一にあげられるが、それは大乗で *satpuruṣa* がより重要視されてゆく階梯と見てよいであろう。

『三昧王経』第九章でも、この *Mv* の *satpuruṣa* を含んだリストのほとんどが見られ、「甚深なる法忍を身につけた〔菩薩〕は、貪欲と憎しみの対象に惑わされない」といい、その人の尊称として、*satpuruṣa* を含む異名を挙げる。この中にも *Mv* のリストのほとんどが反映されている。

(2) 『二万五千頌般若』と漢訳諸本にみる対告衆の *satpuruṣa* 梵本『二万五千頌』(*PV*, Kimura [2009: I-2, 1–2]) にもとづいて対告衆を整理すると、1) 五千人の比丘の僧団、2) 五百人の比丘尼・在家の男性信者と女性信者、3) [無量無数の] 菩薩摩訶薩の順となる。

この3) 菩薩摩訶薩のなかで、固有名としては、① *bhadrāpāla*, ② *ratnākara*, ③ *sāthavāha*, ④ *naradatta*, ⑤ *varuṇadatta*, ⑥ *śubhagupta*, ⑦ *indradatta*, ⑧ *uttaramati*,

⑨ viśeṣamati, ⑩ vardhamānamati, ⑪ amoghadarśin, ⑫ saṃprasthita, ⑬ suvikrāntavikrāmin, ⑭ nityodyukta, ⑮ anikṣiptadhūra, ⑯ sūryagarbha, ⑰ anupamacintin, ⑱ avalokiteśvara, ⑲ mahāsthāmaprāpta, ⑳ mañjuśrī, ㉑ vajramati, ㉒ ratnamudrāhastā, ㉓ nityotkṣiptahastā, ㉔ maitreya という 24 菩薩があげられる。

この箇所の大品系漢訳諸本を見ると、『放光』(23 菩薩)・『光讚』(24 菩薩)・『大品』(22 菩薩)・『第二会』(26 菩薩)とそれぞれ相違がある。また、チベット語訳『二万五千頌般若』の経部では 36 菩薩であるが、論部では梵本に近い 24 菩薩である。このように大品系諸本の間でも相違はあるが、最初に颯陀婆羅 (bhadrāpālā) をあげ、最後に弥勒 (maitreya 慈氏) をあげることは共通している。

その構成メンバーで目につくのは、『放光』で第一に「護諸衆」、第八に「賢護」をあげ、『光讚』で第一に「颯陀和」、第八に「賢守」と、重複して述べていることである。チベット語訳経部では第一が bzang skyong (bhadrāpālā), 第十が skyong pa'i stobs (bhadrabala) と対応することから、この両者は後に重複を避けて bhadrāpālā に統一された可能性がある。

また、これらの菩薩グループには、バドラパーラをはじめとする在家の菩薩や, varṇadatta (水天) のような在家の信者の他, ⑱ 観自在 (観世音) 等の他土菩薩や⑲大勢至, ⑳文殊, ㉔弥勒といった出家の大菩薩も含まれ、在家菩薩と出家菩薩を区分していない。すべて菩薩として括られ、「一生」補處にして尊位を紹ぐ者であるとするばかりである。

ここに satpuruṣa (正士) の語は見られないが、冒頭に挙げられる颯陀婆羅 (bhadrāpālā) 以下の日藏 (sūryagarbha) までの十六尊は、「十六正士、十六賢士」などとして、他の多くの大乗仏典に登場する有名な菩薩たちでもある。ただ本経では、まだ十六正士として確立していなかった。しかし、この菩薩衆から最初の颯陀婆羅から日藏までが十六菩薩として別立てされた可能性は高いと考える。

これら十六正士が『般舟三昧経』の在家の八菩薩から発展したことは、先行研究によって明らかにされている。本経には梵本は残っていないが、最古の支婁迦讖 (179 年) 訳があり、かなり早い段階 (2 世紀頃) にこの伝承が形成されていたようである。そこには善守をはじめ、各菩薩の出自と出身地が明記されており、それは『大智度論』(T1509, 111a) とほぼ同一である。また『十住毘婆娑論』(T1521, 68c16-17) には「跋陀婆羅菩薩は在家の菩薩であり、頭陀を行ず。仏はこの菩薩のために般舟三昧経を説けり」とあり、『観虚空藏菩薩経』(T409, 679b28) にも「是の八菩薩は般舟中より出ず」と引用されるように、般舟三昧経の八菩薩はよ

く知られた伝承であったことがわかる。

5. 『法華経』と『梵天所問経』における十六 satpuruṣa

(1) 対告衆としての satpuruṣa 仏教經典の最初に対告衆として比丘・比丘に列挙するのは通例であるが、大乘經典の場合、その後に、菩薩衆として文殊菩薩から始まり弥勒菩薩を挙げることが多い。しかし、法華経の梵本とチベット語訳では、これに獅子菩薩を加えた計二十五菩薩を列挙した後、「賢護を上首とする十六善士」(bhadrapālapūrvamgamaiś ṣoḍaśabhiḥ satpuruṣaiḥ) を伴っていたとし、具体的に bhadrapāla (賢護) から dharaṇīmḍhara (執印) 菩薩までの十六名の菩薩の名を挙げ、計八万の菩薩がいたとする。一方、漢訳ではこれらの区別はなく、『妙法華』、『添品法華経』は十八菩薩をあげ、その中の第十五番目に跋陀婆羅を組み入れている。しかも、最古訳の『正法華』は二十三菩薩を列挙するが bhadrapāla に相当する菩薩名は見られない。

この状況は、先の『八千頌般若』の satpuruṣa の異名の状況と同じで、漢訳に較べて比較的新しい文献である梵本やチベット語訳になって bhadrapāla が重視されるという特徴がある。こうしてみると、賢護をはじめとする「十六正士」の伝統は最初期の大乗には知られていなかった可能性がある。

このパドラパーラ等の十六サットプルシャは、他の大乘經典でも何度か登場する。例えば、『梵天所問経』が有名であるが、本経には最古の竺法護(286年)訳『持心梵天所問経』の他に、鳩摩羅什(402年)訳『思益梵天所問経』、菩提流支(518年 or 536年)訳『勝思惟梵天所問経』もあり、これら三種の漢訳は、みな跋陀婆羅(賢護)等の十六正士(賢士)と共通して述べる。しかし、その内容は梵本法華経のそれとは少々異なる。その相違点を挙げると主に三点が指摘できる。

第一に、梵文法華経では① bhadrapāla とするのみであるが、『梵天所問経』の竺法護訳と羅什訳では、それぞれ①賢護と⑥賢力、①毘陀婆羅と⑥善力を挙げていて、最新の菩提流支訳では梵本と同じく⑥に対応する菩薩名は欠落している。この傾向は、PV系においても指摘しうる。最古の『放光』の①護諸繫と⑧賢護、および、『光讚』の①毘陀和と⑧賢守と重ねて記されていたのが、『大品』になると⑧に対応する菩薩名がなくなって①毘陀婆羅に統一される。おそらく、もともとは bhadrapāla と bhadrabala の別があったのだろうが、やがて bhadra が混在しているということで、bhadrapāla に統一されていったのであろう。bhadrapāla と bhadrabala の両者があったことは、チベット語訳『二万五千頌般若』(北京版 No.

731) ① bzang skyong (bhadrapāla) と⑩ bzang po'i stobs (bhadrabala) でも確認できる。

第二点は、『梵天所問經』の三訳がともに梵本法華經に欠けている不休息（不置遠）菩薩をあげることである。これはPVの⑮ anikṣiptadhūraであり、他の大品系漢訳四種にもすべて訳語が見られるように、PV系の菩薩リストに近い。

第三点は、これら十六菩薩のメンバーが、順序こそ異なれ、PV系の菩薩リストの最初から日藏菩薩までにすべて含まれていることも指摘できる。ただし、十六正士の最後は⑯ dharanīṃdhana（持地）菩薩であり、これがこの説の独自性を示すものでもある。

以上の点から見ると、十六菩薩は大品系般若の対告衆に見られる賢護から弥勒までの多菩薩が、次第に整理されて、最後に持地菩薩を加えて、在家菩薩として別立てされたものと考えられる。

(2) 六十名の菩薩と十六名の **satpuruṣa** 十六名の正士（善士）という表現が確立すると、さらに出家の菩薩を別立する意識が高まり、六十名の菩薩という表現も成立する。たとえば、梵本『三昧王經』や『護國菩薩所問經』に見られるように、「文殊を上首とする無比の心を持った60名の菩薩摩訶薩」（*mañjuśrīpūrvaṃgamaiś ca śaṣṭibhir anupamacittaiḥ*）と、「賢護を上首とする16名の善士」（*bhadrapālapūrvaṃgamaiś ca ṣoḍaśabhiḥ satpuruṣaiḥ*）が別に記され、これらはすべて菩薩であることが明記される。このように菩薩は中期大乘にいたって、文殊を始めとする出家菩薩と賢護等を始めとする十六の **satpuruṣa** というように、定型的に表現されるようになった。

また、『般舟三昧經』や『法華經』などに見られる五百菩薩を率いる **bharapāla** の伝承も、宝積經系の經典の中で、賢護は王舍城の優婆塞、或いは長者で、五百の優婆塞や長者を率いていた、すなわち「在家者のリーダー」という説の固定化を促進したのであろう。

6. 結論

サットプルシャは初期仏教の中ではブツダ、あるいはすぐれた比丘の呼称である。時には在家の篤信者という意味で用いられる場合もあったが、それはまさに、「高貴なる真実の人」という意味で用いられていたのである。

北方アビダルマになると預流、あるいは不還の聖者と見做すようになり、修行階梯の細分化と共に、七種のサットプルシャ（七善士）が考察された。しかし仏とその弟子という見解も引き続き見られたのである。一方、部派仏教では、ブツダの神格化と崇拝がさらに高まり、前世のブツダ、すなわち菩薩が尊崇されるよ

うになった。これと同じように、サットプルシャもブッダ観の変遷にしたがって変化していった。たとえば *Mv* の燃灯仏崇拜に見られたように、サットプルシャは、将来成道する菩薩と同一視され、菩薩としての特性を付与される。ブッダ、或いは菩薩の呼称の特殊化などはそれを物語るものである。

初期大乘ではこの「菩薩としてのサットプルシャ観」を継承し、次第に多くの菩薩の中でも特別視されるようになった。『般舟三昧経』などで知られるように、在家菩薩の代表としての *bhadrapāla* は最初期の大乗で知られていた。それは初期大乘の起源と在家者との関わりを示唆するものであろう。

その段階を般若経の伝統でみると、毘陀婆羅 (*bhadrapāla* 賢護) は多くの菩薩中の一人に留まっていたが、次第に菩薩の代表として第一に掲げられるようになった。そして、在家にして不退転で一生補処の菩薩という性格が付与されるようになる。しかし、般若経では最後まで出家と在家の菩薩グループという分化は見られない。十六正士説の素材になったのは、『放光』(291年無羅叉訳)をはじめとする大品系般若の菩薩衆であったと考えられる。

一方、『大智度論』に見られるように、現前にブッダを見る瞑想(般舟三昧)を実践する菩薩たちは、具体的な出自を付与され、八菩薩として重要視される。その伝承がさらに発達して、『法華経』や『悲華経』の梵本のように、文殊や弥勒を代表とする出家の菩薩と、賢護を代表とする在家の菩薩に分化し、十六正士というサットプルシャ説に発展し、多くの経典の中で説かれるようになった。また、在家者の代表である賢護が、五百人の菩薩、優婆塞、長者などのリーダーと見なされるようになったのもその展開の一つである。

さらに、中期大乘以降、「文殊を代表とする出家の六十菩薩」と「毘陀婆羅を代表とする在家の十六菩薩」という定型的表現も定着するように、大乘仏教ではサットプルシャを在家者側の代表として位置づけ、その伝承を担う理念的な存在にまで昇華していったのである。

〈キーワード〉 *Mahāvastu*, 般若経, 菩薩, 十六正士

(東洋大学教授・博士(文学))